

中小企業診断士CMC究極の直前予想ゼミ

<まずは！！基本が大事>

経営分析はH22年以前の一般的なパターンをしっかり押さえて下さい

1. 予算編成押さえておこう (21年1次11問)

特別に簿記知識が必要な問題ではない。ただ、この問題を勘定分析として処理する練習をしておけば、急に出題されても焦る事はありません

基本的には直接法のCF計算書作成の際の勘定分析ができれば充分です

第1期		第2期	
現金		現金	
		売掛金 12,000 " 9,000 売上 12,000	買掛金 7,200 買掛金 28,000
売掛金		売掛金	
24,000 12,000		12,000 12,000 18,000 9,000	
買掛金		買掛金	
16,800 24,000		7,200 7,200 28,000 40,000	

2. 税抜額の算定 (税込経理をしている会社の経営分析の問題点)

5%消費税 ÷1.05

8%消費税 ÷1.08

3. CVP&レバレッジ（ほぼ隔年）

全経上級第 170 回原価計算（BEP・レバレッジ・損益分岐点比率） 問題 2

当社の本年度損益計算書は〈資料 1〉〈資料 2〉のとおりである。資料に基づいて問 1 と問 2 に答えなさい。

〈解答上の注意事項〉 計算過程で端数が生じる場合は、小数点以下第 3 位を四捨五入する。

〈資料 1〉

	<u>本年度損益計算書</u>	（単位：円）
売上高	34,000,000	
営業費用		
変動費	20,400,000	
固定費	<u>5,100,000</u>	
営業利益	<u>8,500,000</u>	

〈資料 2〉

次年度以降、当分の間、本年度製品販売量の 15%増加が見込まれるため、手作業の一部を機械に置き換えるための設備投資を考慮している。この投資により単位当たり変動費は 10%減少するが、減価償却費などの固定費が年 799,500 円増加すると見込まれる。製品の販売価格は変わらないものとする。

問 1 〈資料 1〉に基づき①から④に答えなさい。

- ① 本年度の損益分岐点売上高を答えなさい。
- ② 本年度の安全余裕率を答えなさい。
- ③ 本年度の営業レバレッジ度（DOL）を答えなさい。
- ④ 売上高が 15%増加すると、営業利益はいくらになるか、DOL を利用して答えなさい。

問 2 〈資料 1〉に〈資料 2〉を加えて、①と②に答えなさい。

- ① 次年度の損益分岐点比率を答えなさい。
- ② 次年度の不況抵抗力は、本年度と比べて強まるか弱まるか、正しいものを○で囲み、根拠を述べなさい。

4. リスクリターン

最近出題されていないので、今回あたりは注意が必要かもしれません

(「平成 14 年事例Ⅳ第 4 問」を例に説明させていただきます)

現在の書籍店舗販売と新事業として検討されている書籍インターネット販売および中古本販売のそれぞれ今後 3 年間の予想売上高営業利益率とその発生確率については、表 3 に示される推定データを得ている。これに基づいて、事業の収益性に関する次の設問に答えよ。

表 3 予想売上高営業利益率とその発生確率

書籍店舗販売	予想売上高営業利益率 (%)	1.5	2.0	2.5
	発生確率	0.1	0.8	0.1
書籍インターネット販売	予想売上高営業利益率 (%)	-2.0	4.0	8.0
	発生確率	0.3	0.5	0.2
中古本販売	予想売上高営業利益率 (%)	-10.0	10.0	30.0
	発生確率	0.5	0.3	0.2

(設問 1)

3 つの事業の予想売上高営業利益率を期待値 (リターン) で評価すると、どの事業が今後有望と判断できるか、40 字以内で述べよ。

予想売上高営業利益率の期待値が最も高い 4% の中古本販売が有望である

(設問 2)

(設問 1) で得た結果に対して、期待値 (リターン) だけでなくリスクも考慮した事業評価を行うとどのようになるか。60 字以内で説明せよ。

3 年間の営業利益のブレ幅が高い中古本販売がリスクが大きく、ブレ幅が低い書籍店舗販売がリスクが低いと判断できる

標準偏差の計算式を使用して分散の計算をしても良い (下に書籍販売店の例をあげます)

確率	期待収益率	期待値	偏差	偏差 ²	確率	分散	標準偏差
0.1	1.5	2	-0.5	0.25	0.025	0.05	0.02
0.8	2.0		0	0	0		
0.1	2.5		0.5	0.25	0.025		

ゴロ合わせ：歌手期待、返事を変革、文太が標準

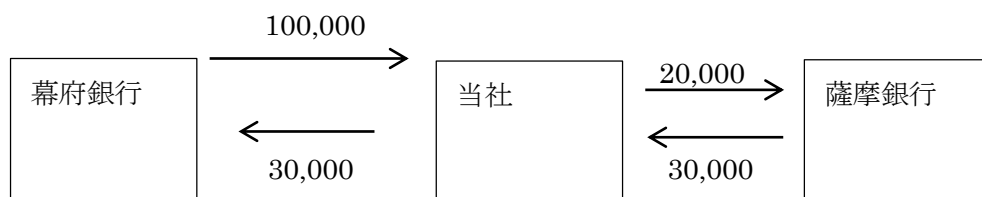
5. 金利スワップ (23年1次試験 21問)

坂本商店は特に資金需要があった訳ではないがふだん世話になっている幕府銀行から変動金利で100,000円借入れを行った。

ただ最近の金利情勢を考えると固定金利の方が有利であったようです。

そこで、変動金利を有利と考えている薩摩銀行と変動金利受取・固定金利(2%)支払のスワップ契約を行った。そこで次の一連の取引における仕訳をなさい

1年後の変動金利は3%であった



①幕府銀行からの借入を行った時の仕訳

現金 100,000 / 借入金 100,000

②薩摩銀行と金利スワップ契約を行った時の仕訳

仕訳なし

③1年後の返済時の仕訳

(幕府) 支払利息 30,000 / 現金 30,000

(薩摩) 現金 30,000 / 支払利息 30,000

支払利息 20,000 / 現金 20,000

→現金 10,000 / 支払利息 10,000

金利スワップは、支払利息を減らそうとする契約なので、科目はすべて支払利息の加減調整を行う

それ以外に、今後の利息の入金予定と支払予定を割り引いて金利スワップの時価を算定して(時価は試験では与えられます)、決算仕訳を行います

④決算につき金利スワップの時価 500円を計上した

金利スワップ資産 500円 / 金利スワップ差損益 500

6. ライフサイクルコストニング

6年後に上場予定のCMC社は、会計システムの刷新を計画している。取得から廃棄までに顧客が負担するトータルコストは現在価値でいくらか？

①PCおよびソフトウェア購入費は1,000,000円である

②年間保守費用が30,000円である

③2年に1回定期点検費用として80,000円必要である

④PCの廃棄時に50,000円の費用が必要である

割引率は5%とし、現価係数は以下の通りである

なお、支払はすべて年度末に行われているとする。

年	1	2	3	4	5	6
現価係数	0.95	0.91	0.86	0.82	0.78	0.75

現在	1年	2年	3年	4年	5年	6年
1,000,000						
	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000
		80,000		80,000		50,000

$$30,000 \times 0.95 + 110,000 \times 0.91 + 30,000 \times 0.86 + 110,000 \times 0.82 + 30,000 \times 0.78 + 80,000 \times 0.75 + 1,000,000 = 1,328,000$$

7. リースと購入の意思決定

CMC社では、ネットワークシステムを新規導入する事にした。総額 1,000 万である。資金調達方法をリースにするか銀行借入にするか検討中である。以下の資料に基づいて、リースと購入の正味現在価値を計算し、どちらが有利かを答えよ。

- ①資本コストは 10%、法人税の税率は 40%である
- ②年間リース料は 240 万で毎年年度末に支払う。リース満了時にはリース会社に返却する
- ④購入時は全額銀行から借り入れる。金利は 8%で元本 200 万とともに年度末に支払う
減価償却は定額法で行う（耐用年数 5 年、残存価額 10%、5 年後の処分価格は残存価額と同じ）

資本コスト 10%の場合の各係数

年	1	2	3	4	5
現価係数	0.909	0.826	0.751	0.683	0.621
年金現価係数	0.909	1.735	2.486	3.169	3.79

<リース案>

—————→					
	144	144	144	144	144

$$NPV = 144 \times 3.79 = 545.76$$

<購入案>

						100
1,000	72	72	72	72	72	
—————→						
1,000	200	200	200	200	200	
	48	38.4	28.8	19.2	9.6	
差引	176	166.4	156.8	147.2	37.6	

$$NPV = 176 \times 0.909 + 166.4 \times 0.826 + 156.8 \times 0.751 + 147.2 \times 0.683 + 37.6 \times 0.621 = 539.0744$$

同じ割引率を使うのは、CFの比較を全社的に行うからです
ひとつひとつの利率を考えるのではなく、すべてのCFを会社のコストで割り引く

8. 耐用年数が異なる投資案の比較

下記の投資案のどちらが有利かを単年度比較で答えなさい

年利：10%

投資案	投資額	毎年 CIF	年数
A	700	300	5
B	1,000	300	7

年金現価係数

年	5年	7年
年金現価係数	3.79	4.81

一般的なパターンで計算すると

$$A \quad 300 \times 3.79 - 700 = 437$$

$$B \quad 300 \times 4.81 - 1,000 = 443 \quad \therefore B \text{が有利}$$

でも、この比較は何かおかしい

Aの投資の6年目以降が比較できない

Aの投資の場合、再投資という考えになる。従って最小公倍数で確認するという考え方はある。でも大変。35年間で比較してたら、それだけで試験終わる。

今回は単年度比較という指定がある

年価：資本回収係数（年金現価係数の逆数）

$$5 \text{年} : 0.26 \quad 7 \text{年} : 0.21$$

最初の投資は毎年いくら投資する事になるのか？

$$A \quad 300 - 700 \times 0.26 = 118 \quad (\text{毎年 } 118 \text{ の利益})$$

$$B \quad 300 - 1,000 \times 0.21 = 90 \quad (\text{毎年 } 90 \text{ の利益})$$

1,000 円の入金、年金現価係数 3.79
 現在価値 $1,000 \times 3.79 = 3,790$

3,790 の投資を毎年の投資に分解するには

$$X \times 3.79 = 3,790$$

$$X = 3,790 \div 3.79 = 1,000$$

$\therefore A$ が有利

8. 知識

のれん→買収・合併・連結時に発生する超過収益力

活動基準原価計算→製造間接費の配賦をより厳密に計算する手法

A製品とB製品を作っている会社が、100,000円の製造間接費をどのように製品に配賦するかという論点

<伝統的な部門別配賦>

部門	切削	組立
部門費	70,000円	30,000円
配賦基準(時間)	A 20時間、B 50時間	A 20時間、B 10時間

<切削部門費>

$$A = 70,000 / 70 \times 20 = 20,000 \text{円}$$

$$B = 70,000 / 70 \times 50 = 50,000 \text{円}$$

<組立部門費>

$$A = 30,000 / 30 \times 20 = 20,000 \text{円}$$

$$B = 30,000 / 30 \times 10 = 10,000 \text{円}$$

$$A = 20,000 + 20,000 = 40,000 \quad B = 50,000 + 10,000 = 60,000$$

<ABCによる配賦>

	発注関連(枚数)	運搬関連(回数)	検査関連(時間)	出荷関連(枚数)
間接費金額	30,000円	50,000円	10,000円	10,000円
A製品	100枚	30回	35時間	5枚
B製品	200枚	20回	15時間	15枚
単価	100円	100	200	500

$$A = 100 \times 100 + 1,000 \times 30 + 200 \times 35 + 500 \times 5 = 49,500 \text{円}$$

$$B = 100 \times 200 + 1,000 \times 20 + 200 \times 15 + 500 \times 15 = 50,500 \text{円}$$

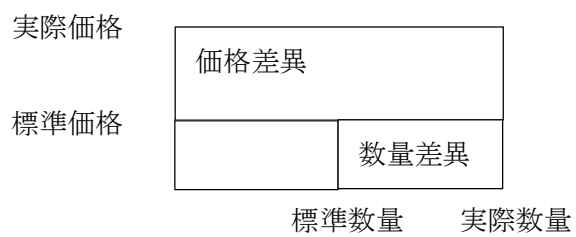
クラウド→インターネット上のハード・ソフト環境などを利用する方法、バージョンアップ等の管理が楽

中小企業の会計に関する基本要綱（21年5問）

<http://www.smrj.go.jp/jinzai/seminar/066838.html>

数量差異と価格差異（23年1次12問）

原価計算の差異分析図を利用する



著作権者である中小企業庁および全国経理教育協会より過去問題を使用する件についての許諾を取っております。